

韓国人学習者の日本語作文に見る「的」付き形容動詞の使用傾向と教育への提言 学習者コーパスと母語話者コーパスの比較を通して

その他のタイトル	Korean Learners' Uses of Na-Adjectives with "-teki" in their Japanese Essays and Educational Implications : Based on Comparison between Learner and Native Speaker Corpora
著者	望月 通子
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	3
ページ	1-16
発行年	2010-10
URL	http://hdl.handle.net/10112/2638

韓国人学習者の日本語作文に見る 「的」付き形容動詞の使用傾向と教育への提言

— 学習者コーパスと母語話者コーパスの比較を通して

*Korean Learners' Uses of Na-Adjectives with “-teki”
in their Japanese Essays and Educational Implications*

— *Based on Comparison between Learner and Native Speaker Corpora*

望月 通子

MOCHIZUKI Michiko

This study purports to compare argumentative essay data of Korean learners of Japanese with those of Japanese native speakers and to clarify learners' uses of na-adjectives with “-teki” and their problems. Korean learners' word-forms and lemmas show that Korean learners frequently use “-teki na N” in adnominal use and “-teki de” and “-teki ni” in adverbial use, while Japanese native speakers “-teki N” and “-teki naN” in adnominal use and “-teki ni,” “-teki niwa,” and “-teki nimo” in adverbial use. It was found that Korean learners tend to use na-adjective with “-teki” more frequently than Japanese, who use more variable na-adjectives with “-teki.” Error analysis found that nearly 13% of adnominal use were misuses of na-adjectives with “-teki”, na-adjectives with non“-teki” or nouns, 45% of adverbial use misuses of “-teki de”, “-teki ni”, “-teki niwa” and “-teki nimo”.

Based on the above findings I propose that we should make a Japanese-Korean list of na-adjectives with “-teki”, practice speaking in other ways and make clear-cut distinctions of “-teki ni”, “-teki-niwa” and “-teki-nimo”.

Key words

‘teki’, ‘na’ adjectives, learner corpus, overuse, underuse

キーワード

「的」、形容動詞、学習者コーパス、過剰使用、過少使用

1. はじめに

「的」付き形容動詞は、明治期に英語の ‘tic’ の訳語に使われ始めたのを契機としてその後

広まることになったが(原:1986, 73-74; 山田:1961, 59-61)、当初は、「健康ノ情感」「化学的ノ反応」のようにその使用の大半は「-的ノN」という形であって、「-的ナN」「-的ナルN」の形が用いられることはほとんどなかったという。明治10年前後から翻訳を中心とした学術書や論文に用いられるようになり、明治15年以降、現代語の「的」の用法に近い「-的ナN」「-的二」の形が出現し、その生産的な造語力と利便性のために、次第に学術書・論説文・新聞記事など硬い文章を中心に広く使われるようになった。接尾辞としての「的」は漢語系語基に付くことが圧倒的に多く、和語・外来語・混種語、固有名詞や引用句などの語基に付くと、硬さよりも曖昧性が浮き彫りにされる。根岸(2007, 29-30)の調査でも、近年、わかりやすい文章を奨励する社会的風潮が高まるなかで、文章の質を強く意識するような書き手は、こうした生産性・利便性がもたらす濫用に対する懸念から、「的」付き形容動詞の使用を控える傾向があることを確認している。日本語の接尾辞「的」の出自が中国語の「的(de)」であるためか、上述したように「的」は漢語系語基に付くことが多い。そのために中国人日本語学習者にとっては母語の知識が正の転移となり得るが、同時に負の転移にもなり得るのである。

曹・仁科(2006)は、中級程度のJFLおよびJSLの中国人学習者が書いた大量の作文データを利用して、形容詞(541例:誤用81例、正用460例)と形容動詞(393例:誤用75例、正用318例)を含む連体用法フレーズ(「形容詞/形容動詞+名詞」と終止用法フレーズ(「名詞+助詞+形容詞/形容動詞」)の共起表現の習得状況について量的、質的分析を行った。同報告のなかで、中国人学習者の「的」付き形容動詞の使用状況と問題点についても明らかにしているが、質的分析の結果、「危険なゲーム」「人力的な物」のような「的」の過剰使用や「屈辱な歴史」のような脱落、「な」「の」の接辞の選択の誤りなどの誤用タイプが多く存在すること、漢字圏である中国人学習者は母語の知識を転移させて上級漢語が自由に使える反面、負の転移によって誤りが生じることもあるということを指摘している。

望月(2010b)は、日本の大学で学ぶ外国人留学生の課題作文を電子データ化したKCOLJ(Kandai Corpus of Learner Japanese、作文総数335)と、これと同じテーマで20歳以上の日本語母語話者に書いてもらった作文を収集して構築したKCONJ(Kandai Corpus of Native Japanese、作文総数157)を利用して、「的」付き形容動詞の連体用法フレーズ、終止用法フレーズ、および連用用法フレーズについて表記形(word-form)に焦点を当ててその使用状況と問題点を明らかにしている。連体用法については、学習者は「-的N」よりも「-的ナN」の使用頻度が多いのに対して母語話者は「-的ナN」(「経済的な基盤」など)よりも「-的N」(「経済的基盤」など)を多用する傾向が見られること、連用用法については、母語話者は「-的二」と「-的二ハ」あるいは「-的二モ」を明確に使い分けているが、学習者は「-的二」と「-的二ハ」あるいは「-的二モ」をほとんど区別しておらずもっぱら「-的二」が多用される傾向があること、誤用としては「的」付き形容動詞の過剰使用と過少使用、「-的二ハ」の過少使用によるものが多いことなどを明らかにしている。

本稿では、上述した中国人学習者に見られる「的」付き形容動詞の使用の特徴と、中国語以外の母語話者の「的」付き形容動詞の使用とを比較するという研究の一環として、韓国人学習者の日本語作文における「的」付き形容動詞の使用の特徴と問題点を解明し、それに基づき教育への提言を行いたい。

以下、第2章では先行研究と本稿の目的、第3章では調査資料、第4章では調査結果と考察、そして最終章ではまとめと教育への提言、および今後の課題という順序で述べていく。

2. 先行研究と本稿の目的

朴（2000）は、日韓両言語における接尾辞「的」の意味・用法について比較分析を行っている。同論文に基づき、「的」の使用に関する両言語間の類似点と相違点をまとめてみたのが、次の(a)(b)(c)である。

- (a) 一般的に日本語の形容動詞は韓国語の「^ハ다形容詞」に対応しているが、字義上、日本語の「的」に相当する韓国語の接尾辞「적（＝的）」は名詞として扱われ、「^ハ다形容詞」の語根とはならない。例えば、下の（1）の終止形「積極的だ」は、指定詞の「이다（＝である）」を用いて（1'）のように表わされる。（2）の連体形「積極的な」は「이다（＝である）」の連体形「인（な）」を付けて（2'）のように、（3）の副詞形「積極的に」は助詞「으로」を付けて（3'）のように表現される。

- （1） 積極的だ
- （1'） 적극적（積極的）이다
- （2） 積極的な性格
- （2'） 적극적（積極的）인 성격
- （3） 積極的に行動する
- （3'） 적극적（積極的）으로 행동하다

- (b) 日韓両言語で「的」付きの形で用いられる語、日本語または韓国語の一方の言語にしか存在せず他方には欠落している語とがある。こうした一方の言語にしか存在しないものは、日本語には存在するが韓国語には存在しない語彙のほうが、韓国語に存在して日本語に欠落している語彙よりも多い。

- （4） 日韓両言語に存在する例

「一般的」「生産的」「科学的」「世界的」「享乐的」など

- (5) 韓国語には存在するが、日本語には存在しない例
「極端的 (= 極端な)」「露骨的 (= 露骨な)」「偏頗的 (= 偏った)」「拳国的 (= 全国的に)」「拳族的 (= 民族的)」など
- (6) 日本語には存在するが、韓国語には存在しない例
「健康的な食生活 (= 健康な食生活)」「統一的な見解 (= 統一した見解)」「母親的存在 (= 母親のような存在)」

(c) 日本語の接尾辞「的」は、漢語系語基以外にも和語・外来語・混種語・固有名詞・引用句などに付く用例も散見されるなど、韓国語に比べて語基の制約が緩く語彙的な多様性が高い。日本語の「的」付き形容動詞は、書き言葉だけでなく話し言葉にも用いられるが、韓国語ではもっぱら書き言葉にしか用いられない。しかし、語彙的な多様性が高いからといって必ずしも日本人の「的」付き形容詞の使用頻度が高いということにはならない。韓国語では「的」の使用域は狭いが、「的」の使用頻度は高い。この背景には、日本語の「的」の大半は韓国語の「적 (= 的)」「같은 (= のような)」「-답다 (= その体言の性質・特性をもっている)」に対応しているが、韓国語は「하다形容詞」以外にも固有語の「-답다」「스럽다」「롭다」「하다」を用いて大量に形容詞を作ることができるということがある。

上述した「的」の使用をめぐる日韓両言語間の共通点および相違点を踏まえ、本稿では、次のようなりサーチクエッション RQ1～4 を立て、量的、質的の両面から分析を行う。

RQ1: 母語話者と比較して、韓国人学習者の作文には「的」付き形容動詞の「過剰使用 (overuse)」が見られるか。

RQ2: 「的」付き形容動詞の表記形、基本形、共起語について比較した場合、韓国人学習者と母語話者の間にはどのような共通点と相違点が見られるか。

RQ3: 韓国人学習者の「的」付き形容動詞の使用には、どのような誤用や非用が見られるか。

RQ4: RQ1～RQ3の結果に基づいて、教育に対してどのような提言を行うことができるか

3. 分析の資料と手順

3.1 分析資料

分析資料は韓国人学習者の日本語作文データベースと、これと同一あるいは類似のテーマで日本語母語話者が書いた作文データベースを利用する。次節では、各資料の詳細について説明を行うこととする。

3.1.1 韓国人学習者の作文資料

本研究では、「国立国語研究所作文対訳データベース」から韓国の大学で収集された韓国人学習者が書いた800字日本語作文239編の中で、学習期間が6か月以上の学習者のデータ228編を利用している。これに筆者が科研費の助成を受けて構築したKCOLJ（研究代表者：望月通子）の作文の中から抽出した韓国人学習者の作文11編を加算し、総数239編としている。

作文課題は、「たばこについてのあなたの意見」（157編）、「あなたの国の行事について」（70編）、「釜山の市場」（1編）、「自殺について」（2編）、「犯罪について」（3編）、「10代の若者」（2編）、「学校教育」（1編）、「自立」（1編）、「テレビの暴力シーン」（1編）、「離婚」（1編）である。学習者情報については、日本語レベルに関する情報は付与されていないが、学習期間は付与されている。対象資料の学習期間は、それぞれ6か月～1年未満34名、1年以上～2年未満80名、2年以上～3年未満49名、3年以上63名、不明13名である。本研究では学習期間による使用状況の分析は行わないので、これら全てを資料として利用している。

3.1.2 日本語母語話者の作文資料

参照データとして使用する母語話者の日本語作文データは、筆者が科研費の助成を受けて構築したKCONJ（研究代表者：望月通子）の157編に別途収集した16編を加え、さらに国立国語研究所作文対訳データベースから母語話者データ66編を加えて合計239編としている。その結果、学習者と母語話者のデータ量が各239編で同数となった。

KCONJは20歳以上の日本語母語話者（数名の学生を含むが、大半は比較的文章を書くことに慣れている成人）に辞書使用や時間の制限を設けずに800字以内のライティングを作成するように有料で依頼し、文書で許諾を得たうえでコーパス化を行っている。母語話者データの作文課題は、KCONJのデータ157編が「わたしの町の自然」「お金と幸せについて」「自殺について」「スポーツについて」「テレビの暴力シーンについて」「10代の若者について」「学校教育について」「自立について」「離婚について」「リサイクルについて」「ネット犯罪について」「死刑は廃止すべきか」「教育と男女差について」、さらに別途収集した16編が「ワープロの使用についての意見」、国立国語研究所作文対訳データベースからの66編は「あなたの国の行事について」（22編）「たばこについてのあなたの意見」（44編）となっている。

学習者作文データと母語話者作文データは各239編で同数となっているのに対し、学習者作文に比べて母語話者作文のテーマの種類が圧倒的に多くなっている。テーマの影響に関しては、「的」付き形容動詞は作文課題に依存する語もあるが、必ずしもそうではないものも多いことや、本研究では基本形だけでなく、むしろ表記形に焦点を置いて分析を行うので、支障はないと判断した。

表1. 「的」付き形容動詞の延べ・異なり語数

データ	延べ語数	異なり 表記形数	Guiraud 値 (異表記形率)	異なり語数	Guiraud 値 (異語率)
NNS_K (239 編)	268	145	8.86	83	5.07
NS (239 編)	257	156	9.73	110	6.86

3.2 分析の手順

まず、学習者作文データ資料 239 編および母語話者作文データ 239 編のそれぞれに生起している接尾辞「的」を含む使用例を全て抽出し、それらの中から「目的」などのいわゆるゴミを除去して、最終的に「的」付き形容動詞だけを抽出する。表記形 (word-form)、基本形 (lemma, canonical form) の頻度と割合を求める (RQ 1, 2)。そして、全使用例を手作業で確認し、学習者にみられる正用と典型的な誤用の例に分類する (RQ 3)。これら 3 つの研究課題を通して「的」付き形容動詞の使用状況について、語彙レベル、構文レベル、意味レベルという異なった観点から多角的に分析を行うことが可能になる。最後に、これらの結果に基づいて教育への提言を行いたい (RQ 4)。

4. 分析結果と考察

4.1 RQ 1 および RQ 2

学習者作文データおよび母語話者作文データ各 239 編からそれぞれ抽出した「-的」のフレーズの中から「目的」のようなゴミを除外して、最終的に抽出された「的」付き形容動詞の使用数を調査したところ、上記の表 1 に示したように、韓国人学習者 (以下、NNS_K と呼ぶ) の延べ語数は 268、異なり表記形数は 145、異なり語数は 83 となった。これに対して、母語話者 (以下、NS と呼ぶ) の延べ語数は 257、異なり表記形数は 156、異なり語数は 110 となった。延べ語数については NNS_K のほうが多少多いが、異なり表記形数および異なり語数については NS のほうが多くなっている。同じ表 1 には、さらに異なり表記形率と異なり語率も記載しているが、いずれも Guiraud 値 (異なり数/ $\sqrt{\text{延べ数}}$) を採用している。NNS_K の異なり表記形率は 8.86、異なり語率は 5.07 であるが、NS はそれぞれ 9.73 と 6.86 となっている。異なり表記形率と異なり語率のいずれも NS の数値のほうが高いことから、NS のほうが語彙の多様性 (lexical variety) が高いということがわかる。つまり、NNS はある限られた同じ表記形を何度も繰り返し使用しているが、NS は同じものを繰り返し使用する代わりにさまざまな異なる種類の表記形を数多く使用しているのである。

下記の表 2 は、NNS_K と NS の「的」付き形容動詞の連体用法、連用用法、終止用法の延べ語数と異なり表記形数を示したものである。NNS_K の延べ語数は連体用法が 144 (54%)、連

表 2. 用法別延べ数・異なり表記形数

NNS_K					
用法	延べ語数	異なり表記形	Guiraud 値 (異なり表記形率)	異なり語数	Guiraud 値 (異なり語率)
連体	144 (54%)	72 (50%)	6.00	61	5.08
連用	96 (36%)	50 (34%)	5.10	41	4.18
終止	28 (10%)	23 (16%)	4.35	17	3.21
計	268 (100%)	145 (100%)	8.86	—	—
NS					
連体	132 (51%)	81 (52%)	7.05	69	6.01
連用	110 (43%)	60 (38%)	5.72	50	4.77
終止	15 (6%)	15 (10%)	3.87	15	3.87
計	257 (100%)	156 (100%)	9.73	—	—

用用法が 96 (36%)、終止用法が 28 (10%) で、異なり表記形数は連体用法が 72 (50%)、連用用法が 50 (34%)、終止用法が 23 (16%) となっている。一方、NS の延べ語数は連体用法が 132 (51%)、連用用法が 110 (43%)、終止用法が 15 (6%) で、異なり表記形数は連体用法が 81 (52%)、連用用法が 60 (38%)、終止用法が 15 (10%) となっている。対象コーパスと参照コーパスを比較すると、NNS_K は NS と同様に、延べ語数も異なり表記形数も連体用法が最も多く、これに連用用法が続いており、終止用法は低頻度で使用が最も少ないということがわかる。すでに上記の表 1 から、NS のほうが NNS_K よりも語彙の多様性 (lexical variety) が高いことを指摘したが、表 2 でも、NNS_K の異なり表記形率と異なり語率はそれぞれ連体用法が 6.00 と 5.08、連用用法が 5.10 と 4.18、終止用法が 4.35 と 3.21 で、NS は連体用法が 7.05 と 6.01、連用用法が 5.72 と 4.77、終止用法はいずれも 3.87 である。どの用法も NS の数値のほうが高くなっており、語彙の多様性が高いということがわかる。

下記の表 3 は、延べ表記形数が 5 以上のものを高頻度順に並べたものである。NNS_K は NS と同様に、「-的ナN」が 1 位、「-的二」が 2 位で、これに 3 位の「-的N(連体)」が続いている。しかし、4 位以下は両者の間にずれが見られ、NNS_K のほうが「*-的デ」、「-的二ハ」、「-的ダ」、「-的デス」と続くのに対して、NS のほうは「-的二ハ」、「-的二モ」、「-的デ(終止)」、「-的(連用)」の順位で続いている。「-的デ」は NS が 6 位であるのに対して、NNS_K のほうは 4 位となっているが、「*-的デ」はすべて本来は「-的二」を用いるべき誤用である。詳細は第 4 章の質的分析の中で取り上げるので、ここでは量的分析だけにとどめ、これ以上は立ち入らないことにしたい。

同じ表 3 を使って今度は語彙の多様性について見てみよう。NNS_K と NS の「-的ナN」はそれぞれ 5.27 と 5.96、「-的二」は 3.96 と 4.93、「-的N(連体)」は 2.52 と 3.61、「-的二ハ」は 2.27 と 2.52 となっていて、どの場合も NS の異なり語率が高くなっている。こうした NNS_K に

表3. 延べ数5以上の「-的」の表記形

NNS_K				NS			
表記形	延べ語数	異なり語数	Guiraud 値 (異なり語率)	表記形	延べ語数	異なり語数	Guiraud 値 (異なり語率)
-的ナ N	121	58	5.27	-的ナ N	82	54	5.96
-的二	78	35	3.96	-的二	76	43	4.93
-的 N (連体)	19	11	2.52	-的 N (連体)	48	25	3.61
*-的デ (連用)	9	6	2.00	-的二ハ	19	11	2.52
-的二ハ	7	6	2.27	-的二モ	9	5	1.67
-的ダ	5	5	2.24	-的デ (終止)	6	6	2.45
-的デス	5	3	1.34	-的 (連用)	6	1	0.41

見られる「的」付き形容動詞の多用性傾向と NS の多様性傾向は、第2章で上述した朴 (2000) の指摘と一致している。

しかし、すでに述べたように NNS_K と NS の作文課題を比べると、その種類において学習者作文のほうが少なく、母語話者のほうが多いという違いがある。そのために上述したような NS に見られる「的」付き形容動詞の語彙的な多様性は、作文課題の多様性によるものではないかという疑問が生じる。下記の表4と表5を使って詳細を見てみよう。それぞれ NNS_K と NS の上位10位までの基本形を示したものである。NNS_K は、1位「社会的」、2位「伝統的」、3位「個人的」、4位「致命的」、5位「世界的」、6位「精神的」、7位「法的」、8位「間接的」「基本的」、10位「一般的」「結論的」で、この11語だけで総使用数の50%を占めている。すでに述べたように、「的」付き形容動詞は「状態性」と「非状態性」の2種類に大別される。1つは語基の名詞が表す性質や特徴をもっていること、つまり「属性」を付加し、もう1つは意見や思考の観点や側面を示すこと、つまり「範囲・カテゴリー」を設定する働きをしている。この11語の中、2位の「伝統的」と4位の「致命的」は「属性の付加」を表しており、学習者作文の大半を占める作文課題「たばこについてのあなたの意見」と「あなたの国の行事について」の影響を受けている可能性が高い。しかし、それ以外の語は、いずれも「範囲・カテゴリーの設定」を表す連用用法で、作文のテーマへの依存度は低いように思う。一方、NSは1位「精神的」、2位「基本的」「経済的」、4位「一般的」「日常的」、6位「社会的」、7位「金銭的」「世界的」「比較的」、10位「圧倒的」「現実的」「最終的」「身体的」となり、この13語で総語数の約40%を占めている。この値は上述の NNS_K よりも低い。この13語はいずれも「範囲・カテゴリー」を設定する用法で、通常、作文課題に左右されることなく、抽象関係や人間の活動の範囲やカテゴリーを設定する表現として幅広く使用されている語彙である。7位の「比較的」は本稿では「的」付き形容動詞に含めたが、一般には副詞として分類されている。

以上、量的分析の結果と考察を報告してきたが、以下のようにまとめることができる。

表 4. NNS_K 上位 10 位 11 語と表記形

基本形・頻度	連体用法			連用用法			終止用法	
社会的 24	社会的 3	-的な 6	*-的の 2	-的に 9	-的には 2	-的にも -的にも 1	-的で 1	—
伝統的 20	伝統的 1	-的な 16	—	-的に 2	—	—	-的で 1	—
個人的 16	個人的 3	-的な 3	-的の 1	-的に 7	-的には 1	—	-のである 1	—
致命的 15	—	-的な 8	—	-的に 2	—	—	-のだ 1	-のです 3
世界的 11	世界的な 3	—	—	-的に 7	—	-的にも 1	—	—
精神的 10	精神的な 4	—	—	-的に 3	-的、-的に 1	-的には 1	-的では 1	—
法的 9	法的 3	-的な 2	—	-的に 2	—	—	-的で 2	—
間接的 8	間接的な 1	—	—	-的に 6	—	-的にも 1	—	—
基本的 8	基本的 1	-的な 5	—	-的に 2	—	—	—	—
一般的 7	一般的な 4	—	—	-的に 1	—	—	-のだ 1	-のです 1
結論的 7	—	—	—	結論的に 4	—	—	的で 3	—
計 135 (50%)	66 (49%)			53 (39%)			16 (12%)	

表 5. NS 上位 10 位 13 基本形

基本形・頻度	連体用法			連用用法			終止用法	
精神的 14	精神的 N4	-的な 3	-的に 2	-的には 1	-的にも 4	—	—	—
基本的 13	基本的 N1	-的な 2	-的に 7	-的には 3	—	—	—	—
経済的 13	経済的 N8	—	-的に 3	-的には 1	-的にも 1	—	—	—
一般的 8	—	一般的な 2	-的に 5	-的には 1	—	—	—	—
日常的 8	日常的 N1	-的な 2	-的に 5	—	—	—	—	—
社会的 7	社会的 N2	-的な 3	-的に 1	—	-的にも 1	—	—	—
金銭的 6	金銭的 N3	-的な 1	-的に 2	—	—	—	—	—
世界的 6	世界的な 2	—	-的に 4	—	—	—	—	—
比較的 6	比較的 6	—	—	—	—	—	—	—
圧倒的 5	—	—	圧倒的に 4	—	—	—	-的で 1	—
現実的 5	現実的 N1	-的な 2	-的に 2	—	—	—	—	—
最終的 5	—	—	—	最終的には 5	—	—	—	—
身体的 5	身体的 N2	—	身体的に 1	—	-的にも 2	—	—	—
計 101 (39%)	39 (39%)			61 (60%)			1 (1%)	

1) NNS_K には「的」付き形容動詞を「多用する」傾向がみられるが、NS には「多様性」がみられる。

2) NNS_K も NS も連体用法が半数を占めるが、連用用法は NS のほうが、終止用法は NNS_K のほうが使用数が多い。

表6. NNS_Kにみる用法別の正用と誤用の比率

用法	正用	誤用	延べ
連体	125 (87%)	19 (13%)	144 (100%)
連用	53 (55%)	43 (45%)	96 (100%)
終止	26 (93%)	2 (7%)	28 (100%)
計	204 (76%)	64 (24%)	268 (100%)

- 3) NNS_KもNSも表記形の使用順位は、1位「-的ナ」、2位「-的二」、3位「-的N」となっている。NSは連体用法については「-的ナ」と「-的N」を、連用用法は「-的二」「-的二ハ」「-的二モ」を使い分けしているが、NNS_Kのほうは連体用法についてはもっぱら「-的ナ」を、連用用法にはもっぱら「-的二」を使っている。
- 4) NNS_Kのほうは多少作文課題の影響を受けていると思われる語が高頻度語に含まれているが、NNS_KもNSも高頻度語は状態性を表す語ではなく、非状態性の語で「範囲・カテゴリーを設定する働きをしている。作文課題に左右されずに幅広く使われている語である。

次節では質的分析の結果を報告・考察する。

4.2 質的分析—誤用分析の結果

上記の表6は、NNS_Kにみられる用法別の正用数と誤用数の比率を示したものである。総数268語の中、正用数は204で76%、誤用数は64で24%となっており、全体の約4分の1が誤用であることがわかる。さらに用法別にみると、連体用法の総数144の中、正用数は125で87%、誤用数は19で13%となっている。次に連用用法については、総数96の中、正用数は53で55%、誤用数は43で45%となっており、連用用法の約半数が誤用ということになる。最後に、終止用法は正用数が26で93%、誤用はわずか2例にすぎない。まとめると用法別では、誤用の1位は連用用法、2位は連体用法、3位は終止用法である。このことから学習者の最大の問題点は連用用法であることがわかる。

表7には、NNS_Kに観察された誤用や非用について、各用法ごとに語彙選択や共起関係のエラーおよび表記形のエラーを分類し、誤用数と実例を1例ずつ示している。

4.2.1 連体用法の誤用

非「的」付き形容動詞や名詞を「的」付き形容動詞で代用している過剰使用エラーが8例、名詞で代用している非用エラーが6例、終止用法の表記形で代用している表記形エラーが1例ある。

表 7. NNS_K にみる誤用の分類

用法	小計	誤用の種類と実例	誤用数
連用	5	語彙選択エラー (1)私も前にはたばこについて <u>不正的な視覚</u> をもっていましたか→悪いという意見(学習期間40か月、以下40mと略す)	2
		共起エラー (2)私はたばこについて <u>否定的な視覚</u> (20m)を持って。→ <u>否定的な意見</u>	3
	14	*「的ノ」→「的ナ」 (3)もっとも大きい <u>国家的</u> の行事だと(44m)→ <u>国家的な</u>	4
		「Nノ」→「的ナ」 (4) <u>伝統</u> の結婚式も民俗村、お祭りのような(29m)→ <u>伝統的な</u>	2
		「的ナ」→「非的付き形容動詞ナ」 (5) <u>極端的な</u> 賛成も反対もしない(19m)→ <u>極端な</u>	5
1	「的ナ」→「Nノ」 (6)これで <u>公式的な</u> 行事はおわります(20m)→ <u>公式の</u>	3	
	1	「的デアル」→「的ナ」 (7)出産という <u>個人的である</u> 問題だけではなく(44m)→ <u>個人的な</u>	1
計 20			計 20
連用	6	語彙選択エラー (8)世の中は発展とともに <u>個人的</u> になる(40m)→ <u>個人主義的</u>	6
		*「的ハ」→「的ニ」 (9)トイレは <u>一次的</u> は目的を失って(15m)、→ <u>一次的に</u>	1
	35	「的ニ」→「的ニハ」 (10) <u>結論的</u> にたばこを吸うのは自由ですけど(24m)→ <u>結論的には</u>	12
		「的ニ」→「的ニモ」 (11) <u>世界的</u> にこのようなたばこのことが(31m)→ <u>世界的にも</u>	4
		「的ニ」→「Nニ」 (12) <u>無条件的</u> に禁止するのは間違いだと(44m)→ <u>無条件的に</u>	8
		*「的デ」→「的ニ」 (13) <u>法的</u> で定めておいたということをきくことが(22m)→ <u>法的に</u>	6
		*「的デ」→「的ニハ」 (14) <u>結論的</u> で私はたばこを吸うことによって(20m)→ <u>結論的には</u>	2
		*「的デモ的デモ」→「的ニモのニモ」 (15)公共場所とか <u>身体的でも精神的</u> で成熟にない人が(20m)→ <u>身体的にも精神的にも</u>	11
*「的デハ」→「的ニモ」 (16) <u>精神的</u> では青れる精神がますます傷つくことに(20m)→ <u>精神的にも</u>	1		
2	「的ナ」→「的ニ」 (17) <u>私的</u> なみんなのが尊重される会社で(44m)→ <u>私的に</u>	1	
	「的ナ」→「非的付き形容動詞ニ」 (18)胎児にも <u>直接的</u> な影響を及びになって(24m)→ <u>直接</u>	1	
計 43			計 43
終止 連体 混同	1	「的デハナイ」→非的付き形容動詞「ナ」 (19)・ <u>正常的</u> ではない(20m)→ <u>正常</u> ではなく	1
	1	*「的ナ」→「的デアル」 (20)それは私がどのくらい <u>保守的な</u> ことだけでなく(19m)→ <u>保守的</u> であるかということだけでなく	1
計 2			計 2

次の(5)は上記の表7から学習期間19か月の学習者の語用例を再掲したものである。

(5) 極端的な賛成も反対もしない(学習期間19か月) → 極端な

学習者は、日本語の形容動詞「極端な」と韓国語の「極端的な」とを混同している可能性が考えられる。第2章ですでに「的」付き形容動詞には日韓両語に存在する語彙と、どちらか一方にしか存在しない語彙があることを述べたが、「極端的」は韓国語には存在するが、日本語には存在しない語彙の1つで、母語の負の転移によるエラーである可能性が高い。

ここでは1例を取り上げただけであるが、非「的」付き形容動詞や名詞との混同による「的」付き形容動詞の過剰使用や過少使用は、第1章で言及した曹・仁科(2006)の中国人日本語学習者の「的」付き形容動詞の誤用に関する研究結果とほぼ一致している。

4.2.2 連用用法の誤用

次に連用用法については、誤用例43の中、語彙選択エラーが6例で、「的デ」の過剰使用が10例、「的二」の過剰使用が16例、「的二」と「N二」との混同が8例、連体用法との混同が2例みられる。

次の(13)は学習期間が22か月の学習者によるもので、上記の表7から再掲した。

(13) 法的で定めておいたということをきくことが → 法的に

「-的デ」と「-的二」の混同による「-的デ」の過剰使用の1例である。日本語の「デ」や「二」には、それぞれ「動作・作用を行うときの状態・状況」や「動作・作用の行われ方、その状態のあり方」を意味する用法があり、「無条件に反対するわけではない」「無条件で反対するわけではない」のようにどちらも使われる場合もある。しかし、日本語の「的」付き形容動詞の連用用法で用いられる表記形は「-的(比較的のみ)」「-的二」「-的二ハ」「-的二モ」であり、「-的デ」は存在しない。存在するのは終止形の「-的デ」だけである。このように連用用法に表記形「-的デ」を過剰使用するエラーは、中国人学習者にはほとんど観察されないものであり、NNS_Kに特有であるといえる。「デ」と「二」を区別しないという韓国語の負の転移の可能性が考えられる。

次の(10)(11)は上記の表7から、(21)(22)は本研究の対象資料から同類の語用例を例示したものである。(10)は学習期間が12か月、(11)は31か月、(21)は44か月、(22)は36か月の学習者によるものである。「結論的に」「個人的に」「医学的に」「世界的に」はいずれも誤用と判定されないまでも、著しく落ち着いた悪い文である。

- (10) 結論的にたばこを吸うのは自由ですけど→結論的には／結論的にいえば／結論としては
- (21) 私は個人的にたばこが嫌いです。→個人的には／個人的にいえば／個人としては
- (22) たばこが人体に悪い影響を与えるという確実な証拠はまだ医学的にみつけれられていないと言っていました。→医学的には／医学的にも／医学においては／医学においても
- (11) 世界的にこのようなたばこのことが → 世界的にも／世界においても

しかし、(10)の「結論的に」を「結論的には」「結論的にいえば」「結論としては」にすると、きわめて座りがよい文になる。これは、ここでの「結論的に」は「状態性」を表す、つまり「属性」を付加しているのではなく、書き手が述べる「範囲・カテゴリー」を設定する働きをしているが、表記形「結論的に」を用いると、この語が修飾的にかかるのは「たばこを吸う」だけとなり、意味が不自然になる。一方、「結論的に」に代えて「結論的には」を用いると、「自由ですけど」（＝自由だと思う）まで修飾的にかかることになり、きわめて落ち着きがよくなる。三枝（2008）は、「について」と「については」を中心に複合助詞と「は」の関係を分析し、義務的に「は」を付加する必要がある場合があるにもかかわらず、そうした指導がなされていないことを指摘している。「結論的には」は「結論については」と言い換えることが可能であり、複合助詞に限らず「的」付き形容動詞についても、「範囲・カテゴリー」を設定する場合には「-的には」と「-的に」の使い分けが必要となる。NNS_Kは義務的に「-的には」としなければならぬ場合にも「-的に」を過剰使用していることが明らかになった。

5. まとめと教育への提言、および今後の課題

本研究では、韓国人日本語学習者の作文データと日本語母語話者の作文データを比較して、学習者の「的」付き形容動詞の使用傾向と問題点の解明を試みた。次のような4つのリサーチクエッションRQ1～4を立て、量的、質的の両面から分析を進めてきたが、以下のような結果および結論を得た。

RQ1：母語話者と比較して、韓国人学習者の作文には「的」付き形容動詞の「過剰使用（overuse）」が見られるか。

母語話者は「多用途性」よりも語彙の「多様性」が高いが、韓国人学習者は語彙の「多様性」

よりも限られた語を「多用する」傾向が強い。

RQ2: 「的」付き形容動詞の表記形、基本形、共起語について比較した場合、韓国人学習者と母語話者の間にはどのような共通点と相違点が見られるか。

韓国人学習者のほうは多少作文課題の影響を受けていると思われる語が高頻度語に含まれているが、韓国人学習者も母語話者も高頻度語は「状態性」を表す語ではなく、「非状態性」の語で「範囲・カテゴリー」を設定する働きをしている。母語話者も学習者も作文課題に左右されずに幅広く使われている語、堀口(1992, 75)のいう、いわゆる旧式の「非状態性・ニセ形容詞」に類する語彙を多用していることが明らかになった。

〈連体用法〉

母語話者も韓国人学習者も「-的ナN」を最も多く使うが、母語話者は「経済的基盤」のように臨時一語も多用する傾向がある。しかし、韓国人学習者は母語話者に比べ「-的ナN」を過剰使用し、臨時一語は過少使用する傾向がある。

〈連用用法〉

母語話者も韓国人学習者も「-的二」を最も多く使う。母語話者は「-的二」「-的二ハ」「-的二モ」を明確に使い分けているが、韓国人学習者はもっぱら「-的二」を過剰使用し、「-的二ハ」「-的二モ」を過少使用する傾向がある。

RQ3: 韓国人学習者の「的」付き形容動詞の使用には、どのような誤用や非用が見られるか。

〈語彙選択・共起エラー〉

日本語に存在する語彙間の選択エラーや共起エラー、日本語には存在しない韓国語の代用によるエラーが見られる。

〈連体用法〉

「的」付き形容動詞と名詞や非「的」付き形容動詞との混同による過剰使用や過少使用が少なくない。

〈連用用法〉

「-的二」に代わり「-的二デ」を過剰使用するエラーが多い。また、「的」付き形容動詞が「非状態性」のもので「範囲・カテゴリー」を設定する働きをする場合には、「-的二」「-的二

韓国人学習者の日本語作文に見る「的」付き形容動詞の使用傾向と教育への提言（望月）

ハ）「-的二モ」を使い分ける必要があるが、「-的二」を過剰使用する傾向がある。

RQ4：RQ1～RQ3の結果に基づいて、教育に対してどのような提言を行うことができるか

- (1) 文章の質を考える書き手は「的」付き形容動詞を濫用しないことを明確にする。
- (2) 「的」付き形容動詞と非「的」付き形容動詞および名詞との混同に対する対策として韓国語および日本語の高頻度の「的」付き形容動詞の一覧を比較し、両言語に共通のもの、一方にしか存在しないものを抽出し、一覧を作成し、指導する。
- (3) 母語話者が多用する臨時一語については、「時事日本語」として指導する。
- (4) 「的」付き形容動詞は「状態性」と「非状態性」に大別される。すなわち「属性」を付加する場合と、抽象関係や人間の活動など「範囲・カテゴリー」を設定する場合とがある。「的」付き形容動詞を別の表現に言い換える練習を行う。
- (5) 連体用法の表記語には「-的N」「-的ナ」、連用用法は「-的二」「-的二ハ」「-的二モ」、終止形は「-ダ」「-デ」「-(ダ)ト(イウ)」などがあることを指導する。(4)との関連で、「範囲・カテゴリー」を設定する場合には、「-的二」「-的二ハ」「-的二モ」を明確に使い分ける練習を行う。

本研究では韓国人学習者における「的」付き形容動詞の使用傾向を明らかにした。連用用法の「-的二」「-的二ハ」「-的二モ」の使い分けについては、語順も考慮する必要があるが、現在、分析中で本稿では取り上げることができなかった。

謝辞 本稿は科学研究費補助金の交付を受けた研究（基盤研究（C）：課題番号19520529研究代表者 望月通子）の一部として行いました。本稿の資料として「国立国語研究所作文対訳データベース」の使用を許可していただき、感謝申し上げます。また、KCOLJおよびKCONJの作文執筆および構築や整形作業にご協力いただいた名古屋大学の阪上辰也氏をはじめとする皆さまにお礼申し上げます。韓国語に関しては、関西大学・高明均教授に貴重なご助言を賜りました。感謝申し上げます。

文献一覧

- 石川慎一郎（2008）『英語コーパスと言語教育』大修館
- 宇佐見英美子（2001）「接尾辞『-的』について」『津田塾大学紀要』33, 239-261, 津田塾大学紀要委員会
- 遠藤織枝（1984）「接尾辞『的』の意味と用法」『日本語教育』53, 125-138, 日本語教育学会
- 王娟・曲志強・林伸一（2001）「『的』付きナ形容詞と非『的』ナ形容詞の分類と意味的特徴」『山口国文石井大教授退官記念特集号』126-146, 山口大学文理学部国語国文学会
- 王淑琴（2004）「接尾辞『的』の意味と『的』が付く語基との関係について——名詞修飾の場合——」

- 『日本語教育』104号, 50-59, 日本語教育学会
- 加納千恵子 (1991) 「漢字の接尾辞の用法に関する一考察(4)——AJN化機能を持つ漢字について」『文芸言語研究 言語篇』20 筑波大学言語・文芸学系
- 小出慶一 (2004) 「接尾辞「～的」の新しい用法——「～的には」という用法について——」『群馬県立女子大学国文学研究』24, 1-14, 群馬県立女子大学国語国文学会
- 三枝令子 (2008) 「複合助詞につく「は」:「について」と「については」」『一橋大学留学生センター紀要』11, 3-15
- 砂川有里子 (1987) 「複合助詞について」『日本語教育』62号, 42-55, 日本語教育学会
- 曹紅荃・仁科喜久子 (2006) 「中国人学習者の作文誤用例から見る共起表現の習得及び教育への提言——名詞と形容詞及び形容動詞の共起表現について——」『日本語教育』130号70-79, 日本語教育学会
- 趙虹 (2008) 「新しい用法における接尾辞「-的」の意味と機能」『日中言語研究と日本語教育』創刊号, 35-43, 好文出版
- 根岸帆和 (2007) 「接尾辞『的』の用法の時代推移について」『日本文学文化』6, 25-35, 東洋大学日本文学文化学会
- 朴大王 (2000) 「接尾辞『的』について——話し言葉における『的』を中心に——」『名古屋大学国際言語文化研究科日本語言語文化専攻』創刊号, 163-180
- 原由紀子 (1986) 「～的——中国語との比較から——」『日本語学』5-3, 73-80, 明治書院
- 広田栄太郎 (1969) 「『的』という語の発生」『近代訳語考』281-303, 東京堂出版
- 藤居信雄 (1961) 「『的』の意味」『言語生活』第119号, 80-83, 筑摩書房
- 船城道雄・望月通子監訳 (2008) 『英語学習者コーパス入門——SLAとコーパス言語学の出会い』研究社, Granger, S (1998). *Learner Corpus on Computer*, Pearson Education.
- 堀口和吉 (1992) 「助辞「～的」の受容」『山辺道』第36号, 59-76, 天理大学国語国文学会
- 望月通子 (2010b) 「接尾辞「～的」の使用と日本語教育への示唆——日本人大学生と日本語学習者の調査に基づいて——」『外国語学部紀要』第2号, 1-12, 関西大学外国語学部
- 望月通子 (2010c) 「日本語学習者と母語話者の『-的』の使用の研究——コーパスを利用して」『2010世界日語教育大会論文集・予稿集』398 1-10
- 山下喜代 (1999) 「字音接尾辞「的」について」『日本語研究と日本語教育』森田良行教授古希記念論文集刊行会 24-38, 明治書院
- 山田巖 (1961) 「発生期における的ということば」『言語生活』120号, 9月号56-61, 筑摩書房

〈コーパス資料〉

「国立国語研究所作文対訳データベース」

KCOLJ (Kandai Corpus of Learner Japanese)

KCONJ (Kandai Corpus of Native Japanese)